

## 第5章

### 感情表出の制御と関連する要因

## 第5章 感情表出の制御と関連する要因

人間の行動の決定因を整理してみると、状況要因、内的媒介要因、個人（人格）要因、発達要因に分類することができる。まず、状況要因はその行動を喚起したり、抑制する外的刺激条件である。内的媒介要因が外的喚起刺激に心理学的生起性を付与する内的過程で、不合理的判断などの認知過程や覚醒水準、欲求や動機の喚起状態などの情緒過程が発生することが挙げられる。個人要因は内的媒介要因の働きに個人的偏りを生じさせる個人差要因で、年齢や性別、認知スタイル、対人態度や欲求、社会的信念、価値観、人格特性などが挙げられる。発達要因とは人格要因の背後にあるもので、個人の発達の諸要因である親子関係、仲間集団、気質などが含まれる。この中で、発達要因は他の3つの要因とは多少次元が異なる要因で、状況要因、内的媒介要因、個人要因が現在進行中の要因であるのに対し、発達要因は過去の要因であり、行動との関係からみると、他の3つより間接的な要因である。感情表出の制御場面において状況要因は「社会的場面で友人との関係において、友人に対する感情あるいは友人の感情と一致しない自分の感情をどう表出するか」という場面で、ある程度状況が設定されている。

そこで、第5章では、最も直接的に行動（感情表出の制御）の予測子として有力な個人要因を取り上げ、感情表出の制御との関連性を検討することにする。

第1節では、性格特性が感情表出の制御に及ぼす影響について検討する。そのためにまず、多様な側面を測定している青年版の性格特性尺度を作成する。

第2節では、親和動機およびシャイネスが各々感情表出の制御に及ぼす影響について検討する。また、親和動機の合計得点による親和欲求とシャイネ

スによる対人態度タイプと感情表出の制御との関連性を検討する。

## 第1節 性格特性と感情表出の制御との関連 [研究9]

性格とは、一般に「各個人に特有の、ある程度持続的な感情・意志、気質などの面での傾向」のことである。その性格特性の測定には、外向性・内向性、男性性・女性性、神経質・楽天性など数多い個人の特性が使用されている。しかし、ほとんどの性格特性を扱う研究では、単一の変数（側面）のみを測定するようになっており、青年を対象とした性格特性を総合的に測定できる尺度はあまり見当たらない。そこで、本節では、まず、性格特性の多様な面を測定できる青年版性格特性尺度を作成し、その性格特性が感情表出の制御に及ぼす影響について検討する。

## 1. 性格特性尺度 (CCQ) の自己報告式 (青年版) 尺度の作成 [研究9-1]

## 目的

本研究では性格特性を測定するために多く用いられている California Child Q-Set (CCQ) の日本語版を作成する。なお、本尺度は青年に使用しやすいように自己報告式 (青年版) にする。青年版 CCQ による日本の青年の性格特性の内的構造を明らかにし、その尺度の信頼性について検討を行う。さらに、作成された青年版性格特性尺度は研究9-2で、性格特性と感情表出の制御との関連性を検討するのに使用される。

## 方法

被調査者 東京都公立高校 2年111名 (男子65名, 女子46名)。学力

のレベルは「中の上」と思われる。

### 調査内容

(a) 性格特性尺度：CCQ (Block & Block, 1980a) の日本語版の項目は Caspi, Block, Block, Klopp, Lynam, Moffitt, & Stouthamer-Loeber (1992) の作成した改訂版 CCQ の中から、さらに Robin, John, Caspi, Moffitt, & Stouthamer-Loeber (1996) が抽出した 60 項目のうち、内容が重複されず、日本語に翻訳してもわかりやすいと思われる 43 項目を選定し作成した。7 件法を採用しており、「非常に当てはまる」から「全く当てはまらない」までの 7 段階に対し、7 点～1 点を与えた。

**調査方法** 各学級で HR の時間または授業時間に一斉に行われた。しかし、一部の学校に対しては、授業時間などの都合で、自宅に持ち帰って次の日に回収するという形で行った。

### 結果と考察

性格特性に関して得られた 43 項目に対して因子分析を行った。主成分法により因子を抽出したところ、固有値が 1 以上の因子は 12 因子が得られたが、固有値の大きさおよび因子の解釈のしやすさの観点から 5 因子を抽出した。これらの因子に対してバリマックス回転を実施した。回転後の各項目の因子負荷量を検討した結果、2 つ以上の因子に対して高い負荷量を有している項目が認められたので、これらの項目を除外し、残った 34 項目に対して因子数を 5 に指定して、再度因子分析を行った (Table 5-1)。この結果に対し、次のように各因子の解釈を行った。

・第 1 因子は慎重さ、注意集中、挑戦、計画的、賢明などが中心的な内容となっているので「慎重・賢明・チャレンジ」と命名する。

Table 5-1 性格特性の質問項目と因子分析結果

項 目	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	h <sup>2</sup>
10. 私はよく注意集中できる方である。	.73	.01	-.05	.10	-.17	.58
34. 私はよく限界まで挑戦する。	.71	-.09	-.06	.16	.19	.58
40. 私は計画的な方だ。	.68	.03	.06	-.03	.03	.47
3. 私は物事をよく考えて行動する方である。	.62	-.04	.07	-.17	-.08	.42
4. 私は簡単に諦めたりしない。	.60	-.21	-.19	-.16	-.09	.47
13. 私は賢明な人である。	.58	-.01	.30	.11	-.20	.47
20. ストレスを感じると、諦めたり回避したりする。	-.48	.22	.12	.08	.27	.38
21. 私は活動（仕事）をするとき、その場に応じて行動できると思う。	.44	-.06	-.05	.08	-.23	.26
16. 私の生活はエネルギーで、充実している。	.22	-.71	-.25	-.04	.16	.65
11. 私は価値のない人間だと感じる。	-.07	.59	-.04	.18	.01	.38
9. 私はストレスに参ってしまう方だ。	-.03	.56	.09	.12	-.07	.34
12. 私は物事に導かれやすい方だ。	.03	.53	.11	-.09	.25	.36
23. 私は非難されたり、からかわれたりすると簡単に傷つく。	.04	.47	.42	.27	.34	.58
14. 私は気分が変わりやすく、安定していない方だ。	-.05	.45	.24	.25	.14	.34
8. 私は前向きである。	.34	-.45	-.07	.02	-.17	.34
22. 型にはまった行為や習慣になった行動が多い。	.04	.43	.13	-.18	.41	.40
15. 私は自分に自信を持っている。	.35	-.39	.13	.06	-.33	.40
24. 私は自分の考えや気持ちをあまり言葉で表さない。	-.06	.08	.73	-.04	.06	.54
26. 私は人とき合うのにちょっと苦労する方だ。	.07	.05	.66	-.09	.16	.48
43. 私は人に言われたことによく従う方だ。	.00	.28	.48	-.03	.29	.40
27. 私は他人に温かく、親切に接する。	.26	-.11	-.47	-.11	.21	.35
1. 私はシャイである。	.01	.15	.45	.04	.05	.23
37. 私はすぐ気が動転したり、イライラする方だ。	-.01	.33	.28	.54	.33	.59
31. 私は注目を集めようと努力する方だ。	.06	.10	.02	.52	-.07	.29
30. 私は攻撃的な方だ。	.22	-.17	.14	.52	.06	.37
35. 私は人の言うことを聞かない方だ。	-.06	.13	.01	.49	-.09	.27
6. 私はユーモアのセンスがある。	.26	.03	-.23	.49	.11	.37
32. 私はよくお話する方だ。	-.10	.17	-.40	.48	.11	.44
33. 私はよく自分の能力を試したり、他者と比べたりする方だ。	.07	.02	.42	.47	.13	.42
36. 私は何か欲しいと、すぐ求める方だ。	-.14	.01	-.10	.38	.05	.18
17. 私は困難な問題に直面したり、ストレスを感じるとき、うまく解決できない。	-.09	.29	-.04	.05	.59	.44
38. 私が興奮したり怒ると、すぐ人に知られる方だ。	-.14	-.01	.08	.30	.47	.34
19. 私はよく泣く方だ。	-.13	-.03	.10	.00	.41	.20
5. 私は言葉で表現することが上手だ。	.30	-.05	-.09	.33	-.41	.38
二 乗 和	3.66	2.91	2.66	2.49	2.01	
寄 与 率 (%)	10.76	8.55	7.82	7.32	5.92	40.38

注) 各因子は、実際は下位尺度であるが、便宜上このように表記する。F1は「慎重・賢明・チャレンジ」、F2は「充実感・融通性・自信などのなさ」、F3は「対人関係の未熟さ・服従的・シャイ」、F4は「攻撃的・短気・外向的」、F5は「感情的」を指す。

・第2因子は自分が価値のない人間だと思ったり、生活が充実していなかったり、物事に縛られやすいということが中心的内容であるので「充実感・融通性・自信などのなさ」と命名する。

・第3因子は人と付き合うことが苦手で、人にすぐ従うような性格がうかがえるので「対人関係の未熟さ・服従的・シャイ」と命名する。

・第4因子は人とよく話をし、ユーモアのセンスもあるが、攻撃的で自己主張が強く、すぐ気が動転したり、イライラすることが中心的内容であるので「攻撃的・短気・外向的」と命名する。

・第5因子は興奮したときは周りの人がすぐ気づくくらい自分の感情が表に出やすく、よく泣き、言葉での表現が上手ではないという性格であるので、「感情的」と命名する。

各因子の項目ごとにクローンバックの $\alpha$ の値を求めたところ、第1因子が、.82、第2因子が、.60、第3因子が、.70、第4因子が、.70、第5因子が、.55であった。第5因子の数値がやや低いが、その他の因子ではある程度の値が得られた。まずまずの内的一貫性が認められたと言えよう。

第1因子の項目得点を反転させてから、各因子間相関を求めた結果、第1因子と第2因子 ( $r=-.31$ ) および第5因子 ( $r=-.33$ ) の間に中程度の負の相関が見られ、第2因子と第3因子 ( $r=.27$ ) および第5因子 ( $r=.31$ ) の間に中程度の相関が、また第3因子と第5因子 ( $r=.22$ ) の間に低い相関が見られた。また、第4因子はどの因子とも有意な相関がなく、他の因子とやや異なる性質を持っていると考えられる。

John, Caspi, Robins, Moffitt, & Stouthamer-Loeber(1994)が作成した児童と青年の性格の5領域 (big five dimensions) の内容は、外向性、共感性、誠実・慎重、感情的安定、開放性の5つである。本研究で得られた因子と比較すると、第1因子「慎重・賢明・チャレンジ」がJohnらの誠実・慎重に相当し、

第3因子「対人関係の未熟さ・服従的・シャイ」の反転が開放性に相当し、第4因子「攻撃的・短気・外向的」が外向性に、第5因子「感情的」の反転が感情的安定に相当しており、その内部構造が類似しているといえよう。

また、Block & Block (1980b) は ego resiliency および ego control という概念による人の性格類型の分類にも CCQ を使用しており、本研究での結果を照合して考えると、「慎重・賢明・チャレンジ」と、「充実感、融通性、自信などのなさ」および「感情的」の反転が ego resiliency の特徴で、「対人関係の未熟さ・服従的・シャイ」が over controlar, 「攻撃的・短気・外向的」が under controlar の特徴に相当する部分であると考えられる。

## 2. 性格特性と感情表出の制御との関連 [研究 9-2]

### 目的

個人の行動を説明する要因の1つとして古くから多く使用されてきたのが、性格特性である。Levy (1983)によれば、性格特性論的立場から特性の共通特徴は (1) 特性は、人間がなぜ同一あるいは類似した状況で異なった反応を示すのかを説明するために使用される、(2) 個人の行動は、何らかの潜在的内的属性の操作によるもので、比較的一貫性を示すものと仮定されるということである。反特性論的観点からは、人間の行動の予測子としての性格特性に対し、様々な批判があるが、最近では、状況要因を注意深く説明すれば十分な予測的妥当性を得ることが可能だという意見にまとまっている(若林, 1993)。

本研究では特性論的観点と状況論的観点の両方の要因を考慮する相互作用論的立場から、人間は一貫して、なおかつ変化する存在であり、人的要因と状況要因は相互作用するものであるという考え方から、感情表出の制御



の予測子の1つとして、性格特性を取り入れる。また、感情表出の制御を測定するための項目は、その状況を説明しているものであり（例：友人が嫌いだというもの（こと）に対し、自分は嬉しく思っているとき、私は嬉しい気持ちを表さない）、状況要因がある程度限定されているため、性格特性が予測子としての役割をすと思われる。

そこで、本研究では、研究9-1で作成された青年版性格特性尺度を用いて、性格特性の5つの側面が感情表出の制御にどのような影響を及ぼすのかを検討する。

### 方法

**被調査者** 東京都公立高校 2年111名（男子65名、女子46名）。学力のレベルは「中の上」と思われる。

#### 調査内容

- (a) 感情表出の制御尺度：研究2で作成したものを使用。
- (b) 性格特性尺度：研究9-1で作成した尺度を使用。

**調査方法** 各学級でHRの時間または授業時間に一斉に行われた。しかし、一部の学校に対しては、授業時間などの都合で、自宅に持ち帰って次の日に回収するという形で行った。

### 結果と考察

性格特性が感情表出の制御にどのように影響するかを調べるため、性格特性の5側面を説明変数、感情表出の制御の5側面を目的変数とする重回帰分析を行った（Table5-2）。その結果を概観すると、「対人関係の未熟さ・服従的・シャイ」と「非仲間志向的制御」との間に.319 ( $p < .01$ )、「対人関係

Table 5-2 性格特性が感情表出の制御に及ぼす影響の重回帰分析

	八方美人的制御 (F1)	非仲間志向的制御 (F2)	自己抑圧的制御 (F3)	同調のための抑制的制御 (F4)	同調のための強調的制御 (F5)
慎重・賢明・チャレンジ (F1)	.139	.010	-.016	.155	.035
充実感・絶通性・自信などのなさ (F2)	.170 †	.064	.043	.126	.179
対人関係の未熟さ・服従的・シャイ (F3)	.035	.319 **	.186 †	.378 ***	-.055
攻撃的・短気・外向的 (F4)	.077	.143	-.094	-.165	.226 *
感情的 (F5)	-.034	-.019	-.129	-.154	-.055
説明率 (R <sup>2</sup> )	.046	.141 *	.052	.200 ***	.085

(注) †p<.10, \*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

の未熟さ・服従的・シャイ」と「同調のための抑制的制御」の間に、.378 ( $p < .001$ ) の標準偏回帰係数が得られた。「攻撃的・短気・外向的」と「同調のための強調的制御」との間に、.226 ( $p < .01$ ) の標準偏回帰係数が得られた。

「対人関係の未熟さ・服従的・シャイ」な性格は自分を抑えすぎる over control のタイプであり、「攻撃的・短気・外向的」な性格は自分を統制しない under control のタイプであると言える。本調査の結果からは over control が抑制的制御を多く行い、また、対人関係が未熟であるため、「非仲間志向的制御」のように不適切な制御を多く行うことと思われる。また、under control は抑制的制御を行わない傾向であり、ネガティブ感情の強調のように怒りやイライラを強めて表すことが明らかにされた。ここから、「非仲間志向的制御」が単に、自ら仲間関係を嫌うことのみでなく、対人スキルが洗練されてなく、シャイな性格であるため、そういう制御をせざるをえないという可能性も考えられる。また、「同調のための強調的制御」はネガティブ感情を強めて表す制御だけに、注目を集めたり、お話しが好きであるなど外向的である一方、攻撃的で強引なタイプの感情表出の制御であると考えられる。

### 研究9の要約

研究9-1では研究9-2で使用するための青年版性格特性尺度を作成した。

研究9-2では、研究9-1で得られた5つの側面の性格特性が感情表出の制御にどのような影響を及ぼすのかについて検討を行った。その結果、「対人関係の未熟さ・服従的・シャイ」な性格の over control は抑制的制御および「非仲間志向的制御」を多く行い、「攻撃的・短気・外向的」な性格の under

controlar は抑制的制御を行わない傾向であり、「同調のための強制的制御」のように友人に同調するために怒りやイライラを強めて表すことが明らかにされた。

## 第2節 親和動機およびシャイネスが感情表出の制御に及ぼす影響

## 〔研究10〕

感情表出の制御はなぜ行われるのか。その理由の一つとして人間関係は欠かせない理由であろう。ある個人にとって、感情表出の制御が意図的に行われるのか（するかしないか）、またはそのパターンの感情表出しかできないのか（できるかできないか）に関わらず、その内面には人間関係が深く関わっていると思われる。例えば、この場面では人間関係の悪化を防ぐために自分の怒りを抑制したほうがいいと思い、本当の感情を表すこともできるが制御して表す人もいれば、対人場面において他者からの評価に直面したり、その場면을想像すると不安になったりし、硬直し、とにかく相手に合わせてしまう人もいるであろう。

感情表出の制御多く行う人のタイプとして考えられるのは、まず第1に、自分一人でも退屈せず、楽しく生きていけるし、対人関係は煩わしいと思い、できるだけ対人関係を避けようとする人である。このタイプの人には、真剣に人と付き合うとか、お互いを理解しあいたいというより、人との関係において必要最小限に摩擦を抑えようとするため、相手に合わせたり、いい加減に付き合ったりするであろう。すなわち、対人志向性や親和欲求が低い人である。

第2に考えられるのは、対人場面での不安が高い人で、他人と同席する場面で、他人から軽蔑されるのではないかと、嫌がられるのではないかと懸念が強く、不当に強い不安と精神的緊張が生じ、どう相手と関わっていいかわからなくなる。ありのままの自分の感情を表すことが、相手との関わりにおいて、少しでも対立や葛藤が生じそうな場合は、相手に合わせたり、相手の気分を損なわないように、自分の感情を多く制御して表出するタイプであ

る。いわゆるシャイネスが高い人である。

第3は、親和欲求が高いが対人場面における不安も高い人で、その理由がどうであれ、人と一緒にいたいという欲求は強いが、対人場面での不安や緊張も強くて、自分の感情の表出を多く制御するタイプである。

以上の考えに基づくと、感情表出の制御の背景を探る際に、親和動機（親和欲求）とシャイネスは重要な示唆を与えてくれることが予測される。本研究では、まず、1) 対人志向の理由の4つの側面に焦点を合わせた親和動機が感情表出の制御に及ぼす影響について検討し、2) 対人関係における不安であるシャイネスが感情表出の制御に及ぼす影響について検討し、3) 親和欲求とシャイネスによる対人態度タイプと感情表出の制御との関係についての検討を行う。

#### 1. 親和動機が感情表出の制御に及ぼす影響 [研究 10-1]

### 目的

人と接したい理由として4つの側面（情緒的支持：精神的に辛いときにだれかがそばにいてほしいため、ポジティブな刺激：人と接触することにより満足や活気、楽しさが得られるため、社会的比較：自己評価や状況の把握のために他者を比較の対象とするため、注目：共感してくれたり、存在価値を認めてくれたりといった、自分に対して肯定的な人と一緒にいたい）に焦点を合わせた親和動機尺度を使用し、親和動機の4つの側面が感情表出の制御にどのように影響するのかについて検討する。

### 方法

被調査者 東京都公立高校 2年 229名 (男子 93名, 女子 136名)。学力レベルは「中の上」であると思われる。

### 調査内容

(a) 感情表出の制御尺度：研究2で作成したものを使用。

(b) 親和動機尺度：Hill (1987) が作成した対人志向尺度を岡島 (1988) が日本語版に翻訳した26項目を使用した。5件法を採用しており、「非常に当てはまる」から「全く当てはまらない」までの5段階に対し、5点～1点を与えた。得点が高いほど親和動機が高いことを示す。信頼性は検証された。

(b) 性格特性尺度：研究9-1で作成した尺度を使用。

調査方法 各学級でHRの時間または授業時間に一斉に行われた。しかし、一部の学校に対しては、授業時間などの都合で、自宅に持ち帰って次の日に回収するという形で行った。

### 結果と考察

親和動機が感情表出の制御にどのように影響するかを調べるため、親和動機の4つの下位尺度を説明変数、感情表出の制御の5側面を目的変数とする重回帰分析を行った (Table5-3)。

重回帰分析の結果を概観すると、「社会的比較」と第1因子「八方美人的制御」との間に $-0.291$  ( $p < .001$ ) , 「社会的比較」と第3因子「自己抑圧的制御」との間に $-0.149$  ( $p < .05$ ) , 「社会的比較」と第4因子「同調のための抑制的制御」との間に $-0.151$  ( $p < .10$ ) , 「社会的比較」と第5因子「同調のための強調的制御」との間に $-0.174$  ( $p < .05$ ) の標準偏回帰係数が得られた。

「社会的比較」の理由で他者と一緒にいたいと思っている人は「八方美人

Table 5-3 親和動機が感情表出の制御に及ぼす影響の重回帰分析

	八方美的制御 (F1)	非仲間志向的制御 (F2)	自己抑圧的制御 (F3)	同調のための抑制的制御 (F4)	同調のための強制的制御 (F5)
情緒的支持	-.048	.099	-.045	.053	.041
ポジティブな刺激	-.066	.034	-.113	.004	.025
社会的比較	-.291 ***	-.098	-.149 *	-.151 †	-.174 *
注目	.021	.040	.097	-.088	.062
説明率(R <sup>2</sup> )	.112 ***	.016	.068 **	.022	.035

注) †p<.10, \*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001



的制御」, 「自己抑圧的制御」, 「同調のための強調的制御」に有意な負の影響を及ぼし, 「同調のための抑制的制御」に負の影響を及ぼす傾向が見られた。

本調査の結果から考えると, 親和動機の中でも「情緒的支持」と「注目」はその個人にとっての特別な他者と一緒にいたいということであるため, 友人一般に対する感情表出の制御に影響力を持たないことと思われる。また, 「ポジティブな刺激」のために人と接したいという人はもともと人と接触することで楽しさを感じる性格であるため, 自分なりに定着された対人スキルが身につけているので, 感情表出の制御においてもその場に応じた多様な対処を行うことと思われる。そこで, 感情表出の制御に一定の影響力を持たないことと思われる。

中村(1990)によると, 「社会的比較」は少なくとも2つの理由から他者との関係に密接に関わっており, まず第1に, 自己に関する評価的認知は他者からの評価によって大きく影響されるからである。自分がいくら有能だと思っても, 自分の仕事に対する否定的評価を同僚から与えられながらも, その仕事に自信をもち続けることを難しいであろう。第2に, 自分自身に関する評価的認知は他者に関する情報によって大きく影響されるからである。自分がどんなに美しいと思っても, 美人コンテストで世界中の美人に囲まれてしまえば, そうでないときよりも, 自分が美人であるという認知をもち続けるのは難しくなるであろう。

このように「社会的比較」のために, 人と接したいという人は, 他者の存在によって自分自身に対する評価や価値観や行動が影響されていることを認めており, こういうことによって, よりの確に自分を評価したり, 未知のところに関する情報を得たりしたいという人である。自己を正確にとらえるために他者と一緒にいたいと思うため, 自分を偽って感情表出の制御を行う必

要がない。すなわち、「社会的比較」のために人と一緒にいようとする傾向が強いほど、感情表出の制御を少なく行うことが明らかになった。

## 2. シャイネスが感情表出の制御に及ぼす影響 [研究 10-2]

### 目的

シャイネスとは社会不安の一種である、社会的場面に見られる対人不安の徴候である。社会不安とは、「現実の、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安」である（鈴木・山口・根建, 1997）。随伴性という点からみるとスピーチ不安などと異なるものであり、「継続的に自分と相手とのコミュニケーションをモニターしなければならず、相手の反応によって随時自分の反応も変化させていくことが求められる、随伴的な対人場面で生じる」という。

感情表出の制御もかなり随伴的な対人場面であり、感情表出の制御を多く行うことの背景の一つとして、対人場面における不安が考えられる。こういう点から、シャイネスと感情表出の制御との関連を検討することは、感情表出の制御の規定要因を検討する上で必要であると思われる。そこで本研究では、シャイネスが感情表出の制御にどのように影響するのかについて検討することにする。

### 方法

被調査者 東京都公立高校 2年 229名（男子 93名、女子 136名）。学力レベルは「中の上」であると思われる。

### 調査内容

(a) 感情表出の制御尺度：研究2で作成したものを使用。

(b) シャイネス尺度：鈴木・山口・根建（1997）がシャイネスに関する文献、特性シャイネス尺度（相川，1991），社会不安の尺度（石川・佐々木・福井，1992；McCrosky, 1970），不合理な信念の尺度（Kassinove, Crisci, & Tiegerman, 1977；松村，1991）などを参考にして作成した，26項目を使用した。5件法を採用しており，「非常に当てはまる」から「全く当てはまらない」までの5段階に対し，5点～1点を与えた。第1因子の「行動（積極性）」と第2因子の「感情（リラックス）」においては得点が高いほどシャイネスが低く，第3因子の「感情（過敏性）」，第4因子の「認知（自信のなさ）」および第5因子の「認知（不合理的思考）」においては得点が高いほどシャイネスが高いことを示す。信頼性と妥当性は検証されている。

**調査方法** 各学級でHRの時間または授業時間に一齋に行われた。しかし，一部の学校に対しては，授業時間などの都合で，自宅に持ち帰って次の日に回収するという形で行った。

### 結果と考察

まず，シャイネスの5つの下位尺度は行動面，感情面，認知面の3側面からなっており，第1因子の「行動（積極性）」は対人関係に積極的であるかについての問いである。第2因子の「感情（リラックス）」は「赤面」「手足のふるえ」「緊張して心臓がドキドキする」など直接的具体的な身体反応を問う項目と，「冷静がどうか」「落ち着いてくつろいでいられる」など全体的な身体的リラックス，または情動を問う項目が含まれている。第3因子の「感情（過敏性）」は，「会話で神経過敏になる」や「人と話していると

気が散って考えがまとまらない」など、人といることにナーバスであることを表している。第4因子の「認知（自信のなさ）」は、「私は好かれるような魅力がない」、「私と一緒にいては不愉快にちがいない」、「会話などで話題がとぎれてしまうのは、いつも自分の方に責任がある」などである。これらの項目に共通するものは、自己に感ずる概して抽象的な、あまり根拠のない自信のなさを表している。第5因子の「感情（過敏性）」は、「私は会う人すべてから好かれ、受け入れられなければならない」、「私は他の人と同じようにたくさん話すことができなければならない」などのように「すべし」「ねばならない」という考えが強い。また、「自分の欠点を見つけられるのは恐ろしいことだ」といったように、自分自身をとりつくろうことに強迫的になっていることを表している。

シャイネスが感情表出の制御にどのように影響するかを調べるため、シャイネスの5つの下位尺度を説明変数、感情表出の制御の5側面を目的変数とする重回帰分析を行った（Table5-4）。重回帰分析の結果を概観すると、「行動（積極性）」と「非仲間志向的制御」との間に $-0.141$  ( $p < .10$ )、「感情（過敏性）」と「同調のための抑制的制御」との間に $0.216$  ( $p < .05$ )、「認知（不合理的思考）」と「非仲間志向的制御」との間に $0.187$  ( $p < .05$ )、「認知（不合理的思考）」と「自己抑圧的制御」との間に $0.162$  ( $p < .10$ )、「認知（不合理的思考）」と「同調のための強調的制御」との間に $0.226$  ( $p < .01$ )の標準編回帰係数が認められた。

すなわち、「行動（積極性）」が「非仲間志向的制御」に負の影響を及ぼす傾向があり、「認知（不合理的思考）」が「非仲間志向的制御」に有意な正の影響を及ぼした。また、「認知（不合理的思考）」が「自己抑圧的制御」に正の影響を及ぼす傾向があり、さらに「感情（過敏性）」は「同調のための抑制的制御」に有意な正の影響を及ぼした。

Table 5-4 シャイネスが感情表出の制御に及ぼす影響の重回帰分析

	八方美人的制御 (F1)	非仲間志向的制御 (F2)	自己抑圧的制御 (F3)	同調のための抑制的制御 (F4)	同調のための強制的制御 (F5)
行動 (積極性)	.039	-.141 †	.002	.121	.072
感情 (リラックス)	.022	.133	-.099	.136	-.054
感情 (過敏性)	.153	.116	.043	.216 *	.041
認知 (自信のなさ)	.013	.020	.019	.077	-.035
認知 (不合理的思考)	.122	.187 *	.162 †	.088	.226 **
説明率 (R <sup>2</sup> )	.055 *	.088 **	.058 *	.103 ***	.065 *

注) †p<.10, \*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

本調査の結果から考えると、「非仲間志向的制御」は人とのつきあいにおいて積極性に欠けており、また「人に好かれなければいけない」とか「自分の欠点を人に見つけられるのは恐ろしいことだ」などの不合理的な認知が一つの要因であると思われる。また、自己の感情を抑える「自己抑圧的制御」と「同調のための抑制的制御」はそれぞれ、対人関係に対する不合理的思考や神経過敏が影響を及ぼすと考えられる。シャイネスの中でも対人関係に対しての不合理的な思考と神経過敏は、内的・社会的不適応と深く関わる感情表出の制御タイプである「非仲間志向的制御」や「自己抑制的な制御」に影響を及ぼすことが明らかにされた。

### 3. 親和動機とシャイネスによる対人態度タイプが感情表出の制御に及ぼす影響 [研究 10-3]

#### 目的

前述したように感情表出の制御は人間関係から生じるものであり、対人関係に対し、どれくらい他者と接したいと思っているのかが重要であろう。つまり、これまでの一般的な考えでは、感情表出の制御を行うことは対人関係を大事にしているため行われるという通念があり、感情表出の制御を多く行う人は親和動機が高いたらうという仮定も成り立つが、一方、最近の青年の特徴である友人関係の希薄さや表面的なよい関係へのこだわりなどを考慮すると、むしろ感情表出の制御を多く行うことは親和動機が低いという仮定も成り立つのである。

現に研究 10-1 と 10-2 の結果から、親和動機が高いからといって感情表出の制御が多く行われることではなく、むしろ親和動機のなかで「社会的比較」

の場合、親和動機が感情表出の制御に負の影響を及ぼすこと、そしてシャイネスが感情表出の制御に正の影響を及ぼすことが明らかにされた。

また、親和動機が高いとしても対人関係に対する不安や間違った考え方や信念が素直に自分を表現することを妨げることになるかも知れない。以上の考えをふまえて、本研究では親和動機とシャイネスによる対人態度タイプを抽出し、感情表出の制御との関連を検討する。

## 方法

**被調査者** 東京都公立高校 2年 229名（男子 93名、女子 136名）。学力レベルは「中の上」であると思われる。

### 調査内容

- (a) 感情表出の制御尺度：研究2で作成したものを使用。
- (b) 親和動機尺度：研究10-1で用いたものを使用。
- (c) シャイネス尺度：研究10-2で用いたものを使用。

**調査方法** 各学級でHRの時間または授業時間に一斉に行われた。しかし、一部の学校に対しては、授業時間などの都合で、自宅に持ち帰って次の日に回収するという形で行った。

## 結果と考察

親和動機とシャイネスは下位概念による分類を行わずに、全体的な傾向をとらえるため全項目の合計得点を使用することとする。すなわち、親和動機の場合はどういう理由で人と一緒にいたいのかより、どういう理由であれどれぐらい人と一緒にいたいのかについて、シャイネスは行動、感情、認知の

どの側面かより、どれくらい社会場面に不安を持っているのかといったように量的に取り上げる。なお、シャイネスの「行動（積極性）」と「感情（リラックス）」は点数を反転させて、得点が高いほどシャイネスが高いように調整を行った。

まず、親和欲求とシャイネスはいずれもがほぼ正規分布と見なされたため、平均値をもとに低群（L群）と高群（H群）に分類し、その組み合わせによって4タイプを抽出した（Fig.5-1, 5-2）。親和欲求（ $M=72.24$ （6.59））では、72.24以下をL群、72.25以上をH群、シャイネス（ $M=71.93$ （12.61））では、71.93以下をL群、71.94以上をH群とし、4対人態度タイプと感情表出の制御との関係を検討するため、1要因分散分析（ONEWAY）を行った。なお、本研究の多重比較には、すべてLSD法が用いられた。

その結果は、「八方美人的制御」、「非仲間志向的制御」、「同調のための抑制的制御」、「同調のための強調的制御」においては、有意な群の効果が認められ、「自己抑圧的制御」においては有意傾向が見られた（第1因子「八方美人的制御」： $(F(3,194)=4.90, p<.01)$ 、第2因子「非仲間志向的制御」： $(F(3,196)=2.92, p<.05)$ 、第3因子「自己抑圧的制御」： $(F(3,199)=2.34, p<.10)$ 、第4因子「同調のための抑制的制御」： $(F(3,196)=3.11, p<.05)$ ）、第5因子「同調のための強調的制御」： $(F(3,197)=2.90, p<.05)$ ）。その結果がTable5-5に示されている。

多重比較の結果、感情表出の制御のすべての側面において、LH群（親和欲求：低、シャイネス：高）とHL群（親和欲求：高、シャイネス：低）の間に有意な差が認められた。すなわち、LH群（親和欲求：低、シャイネス：高）の方がHL群（親和欲求：高、シャイネス：低）より感情表出の制御を多く行うことが明らかにされた。特に、「八方美人的制御」および「非仲間志向的制御」においては、HH群（親和欲求：高、シャイネス：高）もLH



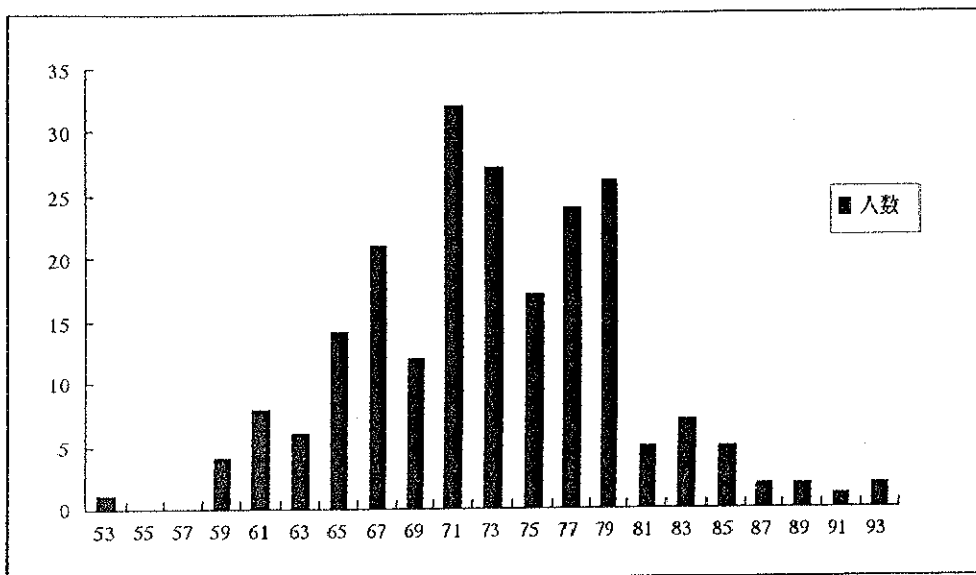


Figure5-1 親和欲求得点の分布

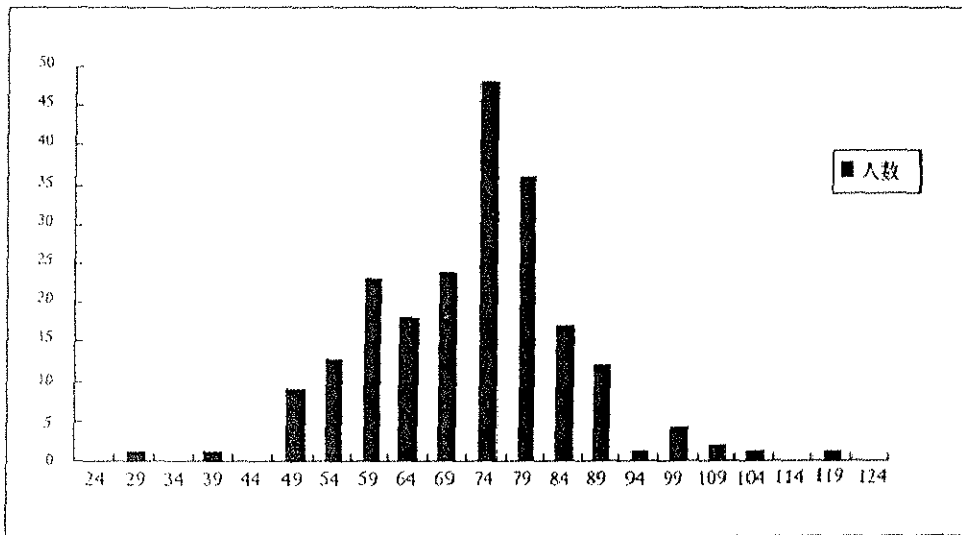


Figure5-2 シャイネス得点の分布

Table 5-5 親和動機・シャイネスによる対人態度タイプにおける感情表出の制御の平均 (SD)

	八方美人的 制御 (F1)	非仲間志向的 制御 (F2)	自己抑圧的 制御 (F3)	同調のための 抑制的制御 (F4)	同調のための 強調的制御 (F5)
LL	16.95 (5.10)	8.80 (3.72)	11.97 (4.11)	9.07 (3.60)	3.90 (2.17)
LH	17.33 (4.36)	9.19 (3.69)	12.70 (4.31)	10.39 (3.29)	4.46 (2.12)
HL	14.04 (4.19)	7.61 (2.74)	10.63 (4.40)	8.56 (3.25)	3.36 (1.84)
HH	16.08 (4.78)	9.61 (3.30)	12.23 (3.38)	9.68 (3.02)	4.17 (1.67)
Type差	4.90 ** HL<(LL・LH・HH)	2.92 * HL<(LH・HH)	2.34 † HL<LH	3.11 * (LL・HL)<LH	2.90 * HL<LH

注 1) LLは親和欲求のL群とシャイネスのL群, LHは親和欲求のL群とシャイネスのH群, HLは親和欲求のH群とシャイネスのL群,  
HHは親和欲求のH群とシャイネスのH群を指す.

2) † $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

群（親和欲求：低，シャイネス：高）と同様に，HL 群（親和欲求：高，シャイネス：低）との間に有意な差が認められた（Fig.5-3）。HH 群（親和欲求：高，シャイネス：高）の場合，人と一緒にいたいという欲求も高いが対人不安や不合理的思考などシャイネスも高いため，どう対処していいかわからず，とにかく人にいい顔ばかりして，相手に対するポジティブな気持ちを強めて表したり，友人の感情に同調してポジティブ感情を強めて表すなどスマイル型の「八方美人的制御」および相手に対するポジティブ感情を抑制し，ネガティブ感情を強めるといったような「非仲間志向的制御」を多く行うことになると思われる。

### 研究 10 の要約

研究 10-1 では，親和動機が感情表出の制御にどのような影響を及ぼすのかについて検討を行った。その結果，「社会的比較」のために，人と接したがる人は，自分の姿を正確にとらえるために他者と一緒にいたいと思うため，自分を偽って感情表出の制御を行う必要がない。すなわち，「社会的比較」のために人と一緒にいようとする傾向が強いほど，感情表出の制御を少なく行うことが明らかになった。

研究 10-2 では，シャイネスが感情表出の制御にどのような影響を及ぼすのかについて検討を行った結果，「行動（積極性）」が「非仲間志向的制御」に負の影響を及ぼす傾向があり，「認知（不合理的思考）」が「非仲間志向的制御」に有意な正の影響を，また「認知（不合理的思考）」が「自己抑圧的制御」に正の影響を及ぼす傾向があり，さらに「感情（過敏性）」は「同調のための抑制的制御」に有意な正の影響を及ぼした。すなわち，シャイネスが高いほど感情表出の制御を多く行うことが明らかになった。

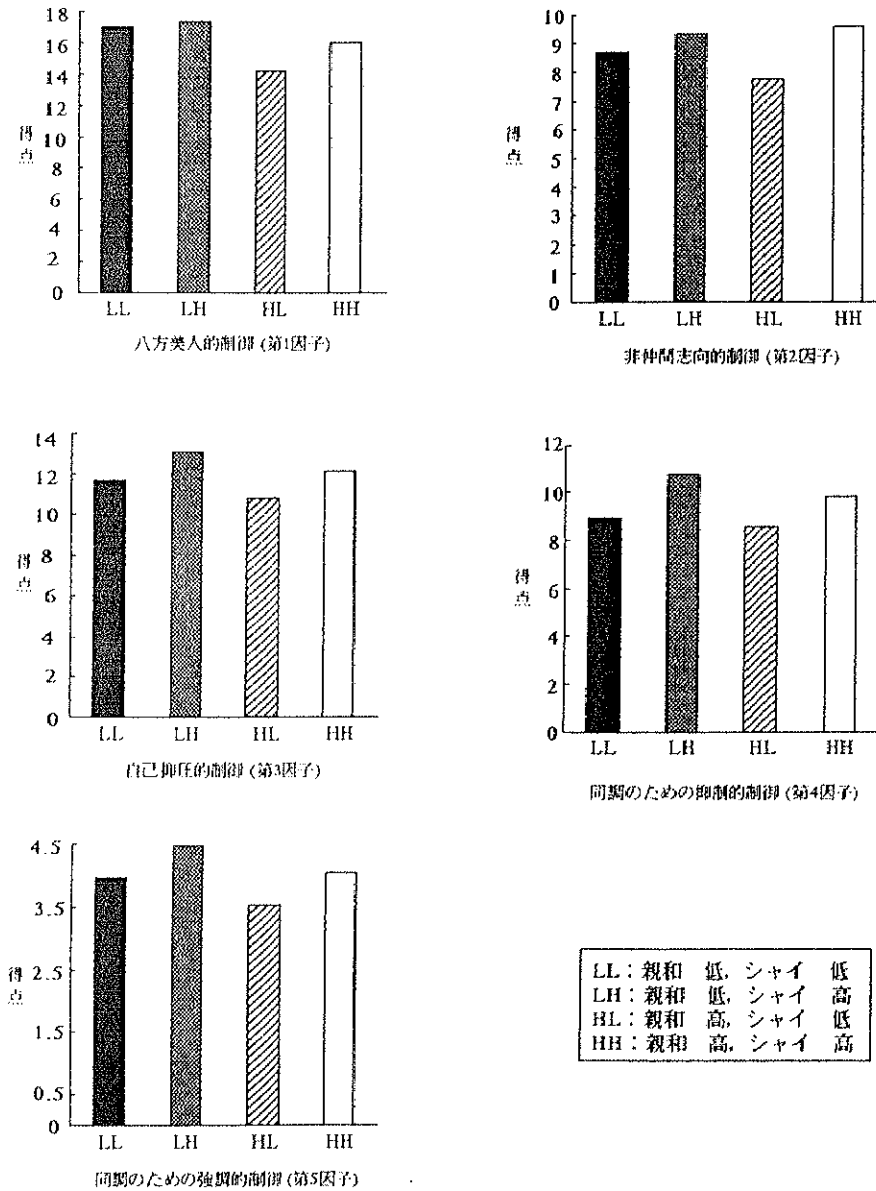


Figure 5-3 親和動機・シャイネスによる対人態度タイプ別における感情表出の制御の平均値

研究 10-3 では、親和欲求とシャイネスによる対人態度タイプと感情表出の制御との関係を検討した結果を全体的に見てみると、親和欲求が低くシャイネスが高い生徒が最も感情表出の制御を多く行い、反対に親和欲求が高くシャイネスが低い生徒が感情表出の制御を少なく行うことが明らかにされた。特に、「八方美人的制御」および「非仲間志向的制御」においては、親和欲求とシャイネスが両方高い生徒も感情表出の制御を多く行うことが示された。すなわち、「八方美人的制御」および「非仲間志向的制御」を多く行う生徒の中には、親和欲求が低くシャイネスが高い生徒、そして親和動機とシャイネスが両方高い生徒が含まれていて、親和欲求とシャイネスが両方高い生徒の場合、友人関係への戸惑いと失敗がより多いと思われ、臨床的介入が必要であると考えられる。

## 第3節 第5章のまとめ

第5章では、感情表出の制御の予測子として有力な個人要因を取り上げ、感情表出の制御との関連性を検討することが目的であった。

第1節では、まず、CCQ尺度を日本語自己報告式の青年版に翻訳・改良し、日本の青年の性格特性の多様な側面を測定できる尺度を作成した。その信頼性が確認され、34項目からなる青年版性格特性尺度が作成された。

次に、性格特性の5側面が感情表出の制御にどのような影響を及ぼすのかについて検討を行った結果、「対人関係の未熟さ・服従的・シャイ」な性格の人、すなわち over controler が抑制的制御を多く行い、また、対人関係が未熟であるため、「非仲間志向的制御」のように不適切な制御を多く行うことが示された。また、「攻撃的・短気・外向的」な性格の人、すなわち under controler は抑制的制御を行わない傾向であり、ネガティブ感情の強調のように怒りやイライラを強めて表すことが明らかになった。

第2節では、親和動機およびシャイネスが各々感情表出の制御に及ぼす影響について検討した結果、親和動機の中で「社会的比較」のために人と一緒にいようとする傾向が強いほど、感情表出の制御を少なく行うことが明らかになった。また、シャイネスの中でも対人関係に対しての「不合理的な思考」と「神経過敏」の人は「非仲間志向的制御」や「自己抑制的制御」を多く行うことが明らかになった。

次に、親和動機の合計得点による親和欲求とシャイネスによる対人態度タイプと感情表出の制御との関連性を検討した結果、LH群（親和動機：低、シャイネス：高）の方がHL群（親和動機：高、シャイネス：低）より感情表出の制御を多く行うことが明らかになった。特に、「八方美人的制御」および「非仲間志向的制御」においては、HH群（親和動機：高、シャイネス：

高)も LH 群 (親和動機：低, シャイネス：高)と同様に, HL 群 (親和動機：高, シャイネス：低)より感情表出の制御を多く行うことが明らかになった。